

修験道は一般的に、神道、道教、仏教、そして山を神・霊・死者の住む場所として信仰する山岳信仰が習合したものであるとして、7世紀に発達した。神道と同様、修験道は自然を敬う強い心を起源としており、山岳信仰は6世紀に仏教が伝来するはるか以前から日本で実践されていたものと考えられている。

その後数世紀にわたって、谷川岳の両峰は「耳二ツ」とも呼ばれ、仏教と神道の習合神である浅間大菩薩が宿る場所として知られるようになった。北側の峰「オキの耳」に浅間大菩薩をまつる神社が建立された。その後、山麓近くに二社（里宮）が建立され、富士浅間神社として現存している。伝承によれば1380年の春のある夜に、眠っていたある村人の夢に富士浅間大菩薩が現れ、この山頂に留まり、村人たちに恵みをもたらすと告げたと伝えられている。村人たちが山頂に登ると、1本の満開の桜を見つけ、その枝にかかっていた鏡をご神体として拝み、その場所に山宮を奉じたとされている。

現在では山岳関係者が7月第1日曜日に山開きの式典と安全登山祈願祭を執り行い、奥の院へ参拝登山を行っている。